

生 *Seikatsu Bunkashi* 史

生活文化史

<史料館だより>

目次

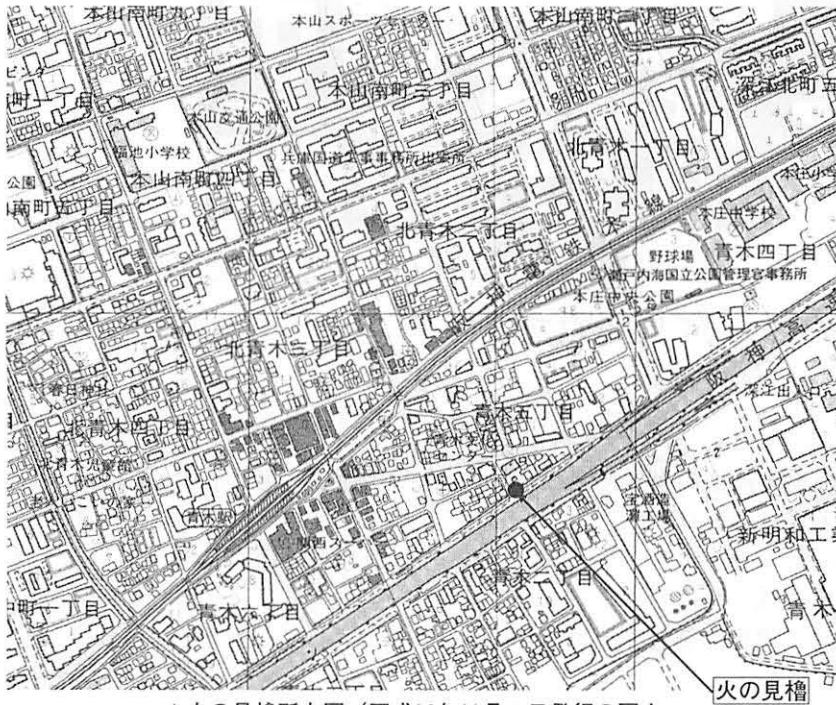
- ◇神戸市東灘区青木所在の火の見櫓について……………望月 浩 2
- ◇展示品との対話（一三）
 - ちゃぶ台 ……………水口千里 6
- ◇入館者5万人達成 …………… 7
- ◇史料館日誌抄・資料寄贈者ご芳名…………… 8

2003. 3. 31
NO.31

入館者5万人達成！
平成15年2月6日に、開館以来5万人
目の入館者となった魚崎小学校3年生
のみなさんの見学風景。(P.7参照)▶



神戸深江生活文化史料館



▲火の見櫓所在図（平成12年11月1日発行の国土地理院1万分の1地形図芦屋を利用したもの）

神戸市東灘区青木所在の 火の見櫓について

史料館学芸員 望月 浩



▲火の見櫓全景図（東北から撮影・撮影望月）

かつて町や村の集落の中心にあり、一番目立つ建築物といえば、「火の見櫓」であった。火の見櫓は、集落の中心や見晴らしの良いところに建てられ、火災などをいち早く発見・報知に重要な役目を果たした。また、村落では火災のみならず、さまざまな緊急時の連絡に使用されていた。そのため、村落で見られるものは、人が上される櫓形式ではなく、半鐘や板木などを家屋よりやや高い自然の樹木や柱に設置して、通信のための施設として活用していた。

しかし、火の見櫓も時代と共に都市部を中心に姿を消している。今回、その存在が貴重になっている火の見櫓が、神戸市街地に現存しているので、報告したい。

今回報告する火の見櫓は、神戸深江生活文化史料館からほど近い、神戸市東灘区青木五丁目一の青木文化センターの西南のすぐ傍らに建っている。コンクリートの基礎上に四本の柱からなる鉄骨を組み、上部には四角形の櫓が組まれている。櫓部分も鉄製で、四角錐の屋根がある。屋根下にかつては半鐘が釣り下げられていた。鉄製の部

分は、赤くペンキが塗られている。

コンクリート製の基礎部は、収納庫として利用されてきた。上部に煙突があり、燃料のガス抜き用のものである。横に扉があり、中には時代によってさまざまなものを収納していた。手押しポンプ車が配備されていたときは、照明用のランブやその燃料が、蒸気ポンプ車の時には石炭、消防自動車の時にはガソリンが収納されていた。今は、何も収納されていない。青木の街を見下ろしてきた火の見櫓であるが、現在では半鐘も下ろされ、消防団のホースを乾かすために使われているだけである。ホースは二〇メートルの長さであるので、二つに折って干してかけると、高さ二三メートルの火の見櫓が、ちょうどいい長さになるのである。さび落とし・さび止め・ペンキ塗りなどをして保存されている。昭和四七年に隣接する青木文化センターを建てる時に撤去する意見もあったが、保存されることになった。かつては、東は西宮市鳴尾^{なると}付近、西は御影の東明^{とうめい}付近まで一望できていたが、今ではすぐ傍らの建物すべてが火の見櫓より高

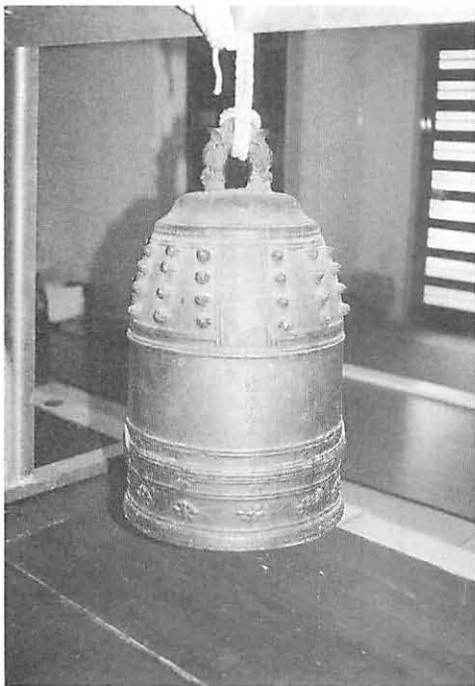


▲櫓部分（西北から撮影・撮影望月）

くなってしまい、埋没した景観になっている。現在この火の見櫓は、東灘消防団青木分団の所有で、青木財産区で管理している。

火の見櫓に吊され、火事の時に打ち鳴らされていた半鐘が二口保管されている。ひとつは、総高が約四八センチメートル、側部に「青木區／寄贈／福辰合金」と彫銘がある。銘に見られる福辰合金は、神戸市東灘区本庄町三丁目に所在し、昭和二四年に合名会社福辰合金製作所として設立されている。福辰合金に問い合せてみたが、詳細は不明であった。また、半鐘の側部には穴が開いている。鳴らしているときに壊れてしまったとのことで、そのためもう一口の昭和十年に寄贈された半鐘を使用したこともあった。

昭和十年寄贈の半鐘は、総高は五一センチメートルで、側部に「昭和拾年／拾貳月吉日／寄贈者／貝谷藤十郎／紀昉粉川／中田元清作」と彫銘がある。昭和五十年代に下ろされた。この二口とは別に、もう一口あったそうだが現在不明なことであるので、これが最初に火の見櫓に掛けられていたものかもしれない。



▲福辰合金寄贈の半鐘（撮影望月）

次に、火の見櫓がいつごろ建てられたのかを考えてみたい。火の見櫓の建設時期は記録がなく、火の見櫓そのものにも建設時期の手がかりになるようなものは見当らない。ただし、全体がペンキで塗られているので、消えている可能性もある。ところが、大正五年（一九一六）生まれの青木在住の海野太二郎氏によると、物心があったときには既に建っていたということである。また同じく青木在住の鈴木武氏は、「古老の大正八年頃建てられたという話や『武庫郡誌』などの記述から、大正三年（一九一四）～同八年（一九一九）頃に建てられたのでは。」と指摘があった。『武庫郡誌』の「青木村消防組」の項には、「明治三十七年（一九〇四）の組織にかゝり、寄附金を以て二號唧筒一臺、及其他の用具を購入せり。當時組員四十六名ありき。大正三年六月二十四日公設消防組となり、更に寄附金を募集し、金百圓を基本財産とし、他を以て、諸道具の整理補充をなし、服装を一定せり。組員三十四名あり。」とある。この「諸道具整備補充」の中に火の見櫓建設も含まれていた、と考えられる。



▲昭和10年貝谷藤十郎寄贈の半鐘（撮影望月）

大正三年の建設とすれば、海野氏の話とも矛盾しない。その後の青木消防分団の記録には、消防車の新調などは見られるが、施設の実等の記述は見当らない。こうしたことから、火の見櫓は大正三年頃に建設されたと考えられる。

では、かつて火災発見に威力を発揮した火の見櫓であるが、一般にはいつごろから設置されたのであろうか。

江戸時代に江戸の町は、「火事と喧嘩は江戸の華」といわれるように、火事が多かった。その中でも明暦三年（一六五七）の振袖火事とも呼ばれる明暦の大火は、江戸開府以来の惨禍といわれた。これを機に、幕府は江戸の町の防災対策の整備を行なうのである。その一つとして、明暦大火の翌年の万治元年（一六五八）に旗本による定火消四組を創設した。この時に火の見櫓が、定火消の拠点となる火消屋敷に建てられたのが始まりとされている。高さは三丈（約九メートル）で、外囲いの部は白木の生漆塗りであった。櫓には大きな太鼓をぶら下げ四隅に半鐘を吊してあった。櫓には常時二名の見張り番がいた。他にも寛永二〇年（一六四三）設置された、大名火消の役についた八万石以上の大名屋敷にも建てられた。高さは定火消のものより低く、二丈五尺（約七・五メートル）ほどであった。脚部は板で囲まれ、墨塗りであった。櫓には板木が吊してあった。また、享保三年（一七一八）に設置された町火消という町方の消防組織が設置される。このときに、十町（約一・〇九キロメートル）に一つずつ火の見櫓を建てるよう命じられ、高さは屋根上九尺（約二・七メートル）、眺望は二町程見通せるように命じられている。脚部は板で囲わない骨組みのみであり、定火消や大名火消と区別されている。また、自身番屋の屋根の上に梯子だけ設置されているところもあった。自身番屋の火の見櫓は、火災があれば板木を打って報せることにし、また火の見櫓近くに風鈴を釣っておいて、風が



▲昭和38年頃の火の見櫓。鳥居は八坂神社。
手前の道は国道43号線。火の見櫓以外に高い
建物が見当たらない。

強くてこの鐘が自然に鳴るような時は、番人の一人が櫓に上がって監視をするようにしているところが多かったようである。しかし、大名火消と町火消が使う火の見櫓には制約があり、定火消が太鼓を叩かない限り、他の櫓で半鐘を鳴らすことは許されなかった。

明治以降になると、若者組の組織を継承した消防組が各村落に組織され、火の見櫓が建てられていった。また、消防署や消防分署・消防派出所にも火の見櫓が設置された。大正時代になると、「望楼」^{はろう}と名前が改められ火災発見に役立ってきたが、今でも「火の見櫓」

という名称で親しまれている。その後建物の高層化や、電話での火事の通報が一般的になってきたため、東京消防庁では、昭和四八年（一九七三）に望楼の運用を中止した。しかし、各地には拡声器などを櫓の四隅に設置したりして、情報伝達施設として利用されているものも残っている。

青木の火の見櫓も今は役目を終え、ひっそりと文化センター横で立っているが、子供たちの地域学習の対象としてセンターへ問い合わせも多いという。いつまでも地域の歴史の証人として保存されてほしい。

最後になったが、海野太二郎氏・海野拓司氏・鈴木武氏には多大なご教示・ご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。

△主な参考文献▽

『武庫郡誌』武庫郡教育会／武庫郡教育会

『神戸市東灘区おうぎのあゆみ』磯辺広好／青木財産区管理会

『ヴィジュアル百科 江戸事情 第三巻政治社会編』NHKデータ

情報部／雄山閣出版

『図録・都市生活史事典』原田伴彦・芳賀登・森谷尅久・熊倉功夫

／柏書房

『火との斗い（江戸時代編）―消防戦術のルーツをたどる―』竹内

平／全国加除法令出版

『江戸の火事と火消』山本純美／河出書房新社

『別冊歴史読本37 江戸の危機管理』新人物往来社

『江戸時代「生活・文化」総覧』西山松之助他／新人物往来社

『江戸火消年代記』藤口透吾／創思社

『日本消防百年史』日本消防協会百周年記念事業常任委員会／日本消防協会

展示品との対話(一三)

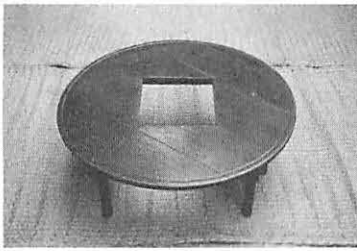
ちやぶ台

史料館研究員 水口千里

「この机の名前、知ってるかな？」
「ちやぶ台！」

毎年恒例の小学校三年生の団体見学で、私の質問に子どもたちはいつも元氣よく答えてくれる。ちやぶ台は、三年生が「むかしのくらし」で学ぶ代表的なくらしの道具である。史料館のちやぶ台の上には、レストランのウインドウにあるような精巧な蠟細工の焼き魚やおひたしなどが並んでいて、子どもたちの歓声があがる。ところが、このちやぶ台、よく見ると少し普通のものとは違う。子どもたちからも時々「どうして？」と質問を受ける。史料館のちやぶ台は、まんなかに四角い穴があいているのだ。

明治に登場したちやぶ台が全国的に普及したのは、大正以降だと言われている。それまでの銘々膳から家族が卓を囲んで食事をする形態への変化は、日本の生活の近代化の象徴とすら言われている。卓袱台、茶袱台などいろいろな漢字があてられ、語源は長崎のシツポク料理の食卓ではないという説が有力ではあるが明らかでない。第二次大戦後にテーブルと椅子があるダイニングキッチンに取って代わられるまで、多くの家庭で愛用されてきた。



▲ちやぶ台

サザエさんの影響からか、ちやぶ台という丸い形を思い浮かべる人が多いが、実は四角いものの方が多かった。食器を入れる引き出しをつけるなど、数々のアイデア商品も出現した。穴のあいたちやぶ台というのは、そんな発明品のひとつである。「すき焼き用の穴」と呼ばれることが多く、コンロや七輪を入れて鍋をのせて使用した。鍋物好きの日本人がいかにも好みそうな道具である。この穴あきタイプは各地で使われていて「しっぽく台」「七輪台」「すきやき台」などいろいろな名称で呼ばれている。史料館の資料は、平成七年(一九九五)に阪神淡路大震災で蔵が倒壊したお宅から寄贈を受けたものである。寄贈者のお宅は神戸市東灘区森北町にあり、被害が大きかった地区のひとつであった。

ちやぶ台には、穴をあける以外にもいろんな工夫が施された。よく見るのは脚を折り畳めるようにしたもので、特許や実用新案の公報に多くのアイデアが残されている。確かに狭い住宅で、使い終わったら簡単に折り畳んで壁際に立てかければ布団が敷けるというのは大きな魅力だっただろう。

ちやぶ台がすたれ、テーブルと椅子が普及しダイニングの場所が独立したことは、一般的には日本の住宅事情の改善と理解されている。しかし、折り畳んで片付ければ、そこにどんな風にも利用できるスペースが生まれるちやぶ台は、居住面積の小さい日本家屋に最も適した家具のひとつではないだろうか。それは、最近若い人の間でテーブルこたつが見直され人気を集めていることと決して無関係ではないだろう。

△主要参考文献▽

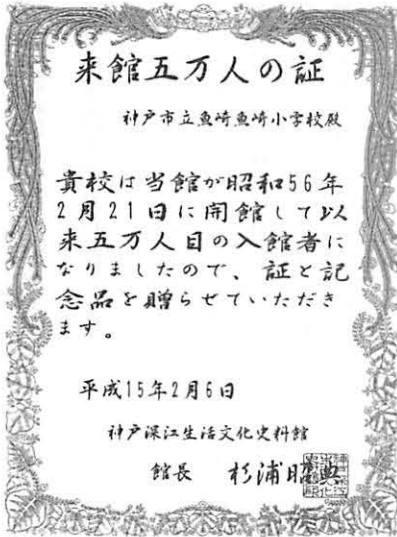
国立民族学博物館研究報告別冊 一六号「現代日本における家庭と食卓―銘々膳からチャブ台へ―」石毛直道・井上忠司編 一九九一年 国立民族学博物館

史料館の入館者5万人突破!

二〇〇三年二月六日(木)に、一九八一年二月二十日開館以来、五万人を突破しました。五万人目の入館者となったのは、神戸市立魚崎小学校三年生のみなさん(二〇五名)で、杉浦館長より「来館者五万人目の証」と記念品を贈らせていただきました。



▲「来館者五万人目の証」が魚崎小学校3年生の代表足立涼くんへ杉浦昭典館長より手渡される。



▲来館者五万人の証

不申

戸

新

聞

2003年(平成15年)2月7日 金曜日



住民手づくりの街角の博物館が5万人目の入館者。魚崎小児童が昔の生活道具を興味深そうに見学した—神戸深江生活文化史料館

設立から20余年 震災も乗り越え 入館5万人を達成

東灘の深江生活文化史料館 魚崎小児童ら見学

東灘区の旧本庄村の住民らが設立、運営している博物館「神戸深江生活文化史料館」が、開館20周年を迎え、設立から20余年、震災も乗り越え、入館者5万人を達成した。

深江地区に隣接する青木・西青木地区は、一八八九年から本庄村として歩んできたが、一九五〇年、東灘区誕生に伴う合併で消滅した。消えた村の歴史を残そうと、同管

文化史料館」は同区深江本町三が六日、五万人目の入館者を迎えた。阪神・淡路大震災の危機も乗り越えて到達した節目に、ボランティアとしてかわる館員らは「地域に根付いた史料館として新たな出発点にしたい」と話している。

同史料館は一九八一年、地域の共有財産を管理する深江財産区管理会が設立した。深江地区に隣接する青木・西青木地区は、一八八九年から本庄村として歩んできたが、一九五〇年、東灘区誕生に伴う合併で消滅した。消えた村の歴史を残そうと、同管

理する深江財産区管理会が設立した。深江地区に隣接する青木・西青木地区は、一八八九年から本庄村として歩んできたが、一九五〇年、東灘区誕生に伴う合併で消滅した。消えた村の歴史を残そうと、同管

▲神戸新聞、平成15年2月7日朝刊

史料館日誌抄

史料館研究員 道谷 卓

平成十四年四月以降

△平成十四年▽

6月6日 トライやるウィーク・本庄中学校二年生二名を受入

／7日 れ、二日間に渡り史料館の業務を体験してもらう。

7月5日 東灘区役所新規採用職員研修（見学者 二八名）

7月27日 東灘区役所・わくわく親子歴史探検隊（見学者 四七名）

11月24日 AM神戸・青木歴史ウォーク（見学者 一〇〇〇人）

△平成十五年▽

1月16日 六甲小学校 三年生（見学者 五一名）

1月20日 西郷小学校 三年生（見学者 六二名）

1月21日 なぎさ小学校 三年生（見学者 五六名）

1月23日 本庄小学校 三年生（見学者 一〇五名）

1月24日 こうべ小学校 三年生（見学者 八九名）

1月30日 東灘小学校 三年生（見学者 一四五名）

1月31日 本山第三小学校 三年生（見学者 八六名）

2月3日 福住小学校 三年生（見学者 六四名）

2月4日 雲中小学校 三年生（見学者 八〇名）

2月6日 魚崎小学校 三年生（見学者 二〇五名）

Ⅱ入館者五万人突破

2月7日 西灘小学校 三年生（見学者 五六名）

2月10日 本山南小学校 三年生（見学者 七一名）

2月13日 摩耶小学校 三年生（見学者 五四名）

2月14日 灘小学校 三年生（見学者 四四名）

2月20日 福池小学校 三年生（見学者 六〇名）

2月27日 宮本小学校 三年生（見学者 二〇名）

水木小学校 三年生（見学者 五七名）
 2月28日 御影小学校 三年生（見学者 六七名）

資料寄贈者ご芳名（敬称略・二〇〇二年四月）以降

△西垣良雄▽野外用おりたたみテーブル、旗／△北条みち子▽古
 銭一式／△深江会館▽ダイヤル式黒電話／△村上明和▽大型旅行鞆

編集後記

開館二二年で入館者五万人という大きな節目を迎えました。今度
 は六万人の節目に向け、さらに史料館の活動を充実していければと
 思っています。

今年も恒例の小学校三年生の団体見学の受け入れを無事終えるこ
 とができました。過去最多の一八校の子供達がちよつとむかしのく
 らしを体験したことになります。（T・M）

『生活文化史』 第31号 03・3・31
 編集／道谷 卓
 発行／神戸深江生活文化史料館

〒658-0021 神戸市東灘区深江本町3-15-17
 ☎ 078-45314980（FAX兼用）